

Oracle8i Lite リリース・ノート リリース 4.0.1.2

本製品は、Oracle8i Lite リリース 4.0.1.2 です。このリリース・ノートでは、次の製品に関する最新の拡張機能、新機能、既知の制限事項、マニュアル上の問題点、さらにトラブルシューティングのヒントを説明します。

1. [Oracle Lite](#)
2. [Oracle Lite for Handheld Devices](#)
3. [Oracle iConnect Consolidator](#)
4. [Oracle Web-to-go](#)
5. [Oracle AQ Lite](#)
6. [インストールに関する注意事項](#)
7. [4.0.1.2 CJK 版における補足事項及び制限事項](#)

注意:

- ・ 製品コンポーネントのリスト、システム要件、およびインストール手順については、『Oracle8i Lite インストレーション・ガイド』を参照してください。Oracle_Home は、Oracle Lite がインストールされているディレクトリを指します。
- ・ このリリースに含まれる Palm 版および EPOC 版、iConnect Consolidator 機能は英語版です。日本語版の Consolidator For Palm を利用される場合は、同梱の CD-ROM「Oracle8i Lite R4.0」からお使いください。

1. Oracle Lite

この項では、Oracle Lite に関する拡張機能、新機能、認識されている制限事項、さらにトラブルシューティングのヒントを説明します。

1.1 Oracle Lite の拡張機能と新機能

1.1.1 Oracle Lite のデータベース・フォーマットとその移行

このリリースでは、新しいデータベース・フォーマットが使用されています。Oracle Lite リリース 3.5 (およびそれ以前のリリース) で作成したデータベースは、提供されている移行ユーティリティを使用して移行する必要があります。移行ユーティリティの詳細は、『Oracle Lite ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1.1.2 Oracle Lite のパスワード

すべてのユーザー接続についてパスワードが検査されます。下位互換性を保つために、デフォルト・データベースのユーザーSYSTEM はすべての権限を保持しています。ただし、SYSTEM は最初はパスワードなしで作成されます。SYSTEM のパスワードを追加するには、SQL*Plus を使用して次のコマンドを発行します。

ALTER USER SYSTEM IDENTIFIED BY <password>

1.1.3 Oracle Lite の DLL の変更とファイルの追加

ダイナミック・リンク・ライブラリ(DLL)の名前が変更されています。名前の書式は **ol*40.DLL** です。新しい名前は次のとおりです。

DLL 名	ライブラリ名	説明
olobj40.dll	olobj40.lib	OKAPI インタフェース
olod2040.dll	olod2040.lib	ODBC 2.0 ドライバ(ODBC SDK)
olad2040.dll	N/A	ODBC Administrator 2.0
oljac40.dll	N/A	JAC ネイティブ・ライブラリ
oljdbc40.dll	N/A	JDBC ネイティブ・ライブラリ
olrep840.dll	N/A	Oracle8 Server レプリケーション・サポート

注意: Oracle Lite Recovery Manager(**OLITERM.exe**)は、**OlitRM40.exe** という名前に変更されています。Oracle Lite DBMS の JAR ファイルの名前は、**OLite40.JAR** です。

1.1.4 Oracle Lite のパフォーマンス

問合せパフォーマンスの向上のために、様々な改善が実施されています。SELECT 文はメモリー・キャッシュの消費量が少なくなり、より高速で実行されます。GROUP BY 句および ORDER BY 句は、適切な索引が使用可能な場合はソートの回避を試みます。

1.1.5 Oracle Lite の SQL コマンド・セットの拡張

1.1.5.1 ALTER TABLE MODIFY

このリリースでは、ALTER TABLE MODIFY 文がサポートされています。これにより、表内の列のデータ型、デフォルト値および制約の状態を変更できます。

1.1.5.2 表の副問合せの作成

Oracle Lite の、今回のリリースでは、副問合せから表を作成できるようになりました。この機能を使用により、問合せ (SELECT 文) の結果に基づいて表を作成および移入できます。

1.1.5.3 比較機能の拡張

Oracle Lite の、今回のリリースでは、副問合せでの比較に行値コンストラクタを指定できます。複数列の結果を返す副問合せを使用して列または式を比較できるようになりました。

1.1.5.4 列としての副問合せ

Oracle Lite の、今回のリリースでは、列値のかわりに副問合せを指定できます。この機能により、算術式を含む単一値の副問合せを使用できます。

1.1.5.5 テキストとしての Java ソースの拡張

CREATE JAVA SOURCE が拡張され、コマンドに指定されたテキストから Java ソース・クラスを作成できるようになりました。

1.1.5.6 制約の拡張

Oracle Lite の、今回のリリースでは、「CHECK」制約で TRANSLATE 関数がサポートされます。

1.1.5.7 グローバルな一時表のサポート

Oracle Lite の、今回のリリースでは、CREATE GLOBAL TEMPORARY TABLE 構文をサポートします。これを使用すれば、ユーザーは 1 トランザクションまたは 1 セッションの間のみ存在するセッション専用データを保持する一時表を作成できます。CREATE GLOBAL TEMPORARY TABLE コマンドは、トランザクション固有またはセッション固有の一時表を作成します。トランザクション固有の一時表の場合、データはそのトランザクションの間存在します。セッション固有の一時表の場合、データはそのセッションの間存在します。一時表内のデータはセッション専用であり、各セッションではそのセッション専用のデータのみを表示および変更できます。

1.1.6 Oracle Lite での Java サポートの拡張

Oracle Lite は、Oracle8i と互換性のある、拡張された Java 構文およびセマンティックスを提供します。SQLJ、JDBC、Java サブレット、Java ストアド・プロシージャおよびトリガーを使用して開発した Java アプリケーションは、Oracle Lite と Oracle8i 上で開発および配布することができます。Oracle Lite での Java サポートの拡張の詳細は、『Oracle Lite Java 開発者ガイド』を参照してください。

1.1.7 Oracle Lite での JDK のセットアップ

Java アプリケーションを開発するには、サン・マイクロシステムズ社の Java Development Kit (JDK) バージョン 1.1.8 (またはそれ以上) が必要です。JDK は本製品には同梱されていません。JDK はサン・マイクロシステムズ社の Web サイトからダウンロードしてください。JDK 1.2.2 の使用をお勧めします。

Oracle Lite をインストールした後、JDK をインストールして環境をセットアップできます。該当するインストール・ディレクトリ (C:\jdk1.2 など) を選択します。Oracle Lite が JDK とともに稼働できるよう PATH および CLASSPATH 環境変数を設定します。PATH および CLASSPATH の設定は、使用する JDK のバージョンによって異なります。環境の構成方法の詳細は、『Oracle Lite Java 開発者ガイド』第 1 章「Oracle Lite の Java サポート」の「環境の設定」を参照してください。

1.1.8 Oracle Lite の JDBC 拡張

このリリースには、バイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) およびキャラクタ・ラージ・オブジェクト (CLOB) データ型に対する JDBC サポートが含まれています。Oracle Lite では、ラージ・オブジェクト・データ型のサポートとともに、ラージ・オブジェクトの値を設定および検索するメソッドも提供します。ラージ・オブジェクトのサポートは、JDBC 2.0 仕様の機能と Oracle8i の JDBC 実装に準拠しています。

1.1.9 Oracle Lite での Java パッケージ名

Oracle Lite の Java パッケージ・コンポーネントのパス名が、「oracle.pol」から「oracle.lite」に変更されています。

1.1.10 Oracle Lite の Java アクセス・クラス (JAC) の強化

このリリースでは、Oracle Lite の Java アクセス・クラス・インタフェースに対して、次のサポートを含む様々な拡張が追加されています。

- サポートされている原子タイプ (atomic type) の多次元配列
- Java データ型と Oracle Lite データ型の暗黙的変換
- シングル・ユーザー分離レベル
- ROWID
- シーケンス・オブジェクト (データベース全体で一意である列値を作成するときに使用できます)

1.1.11 Oracle Lite の Java アクセス・クラス (JAC) のガベージ・コレクション

JDK 1.2 を使用する場合、Java 仮想マシンは JAC により返される永続オブジェクトに対してガベージ・コレクションを実行します。POLObjHdl.discardObj を明示的に

コールする必要はなくなりました。ただし、JDK 1.1 ではオブジェクトを明示的に廃棄する必要があり、パフォーマンスを最適化する場合は、まだ `POLClass.createNewObjQuiet` を使用する必要があります。
`POLConnection` の新しいメソッド `getCacheSize` が、JAC のキャッシュのサイズを監視します。

1.1.12 Oracle Lite の Java ストアド・プロシージャとトリガー

このリリースでは、Oracle Lite で Java ストアド・プロシージャを実装するために Oracle8i モデルが使用されます。Oracle8i モデルでは、表にクラスをアタッチするかわりに、`loadjava` コマンド・ライン・ユーティリティまたは SQL の `CREATE JAVA` コマンドを使用して、Oracle Lite データベースに Java クラスをロードします。データベースにクラスをロードした後、SQL からコールするクラスにメソッドをパブリッシュします。メソッドをパブリッシュするには、`CREATE FUNCTION` または `CREATE PROCEDURE` コマンドのいずれかを使用します。Oracle Lite では、Java クラスをユーザー定義表にアタッチします。クラスの静的メソッドはその表の表レベルのストアド・プロシージャになり、非静的(インスタンス)メソッドは行レベルのストアド・プロシージャになります。

さらに、Oracle Lite では Java トリガー用の列のキャストもサポートするようになりました。

注意: `table_name.method_name` の形式でプロシージャをコールしたときに、その名前の表またはメソッドが存在しないと、Oracle Lite では `table_name` はスキーマ名を指すものと解釈されます。`method_name` のみを参照した場合、Oracle Lite では、参照されたメソッドは、表にアタッチされた行レベルのプロシージャであると解釈されます。ただし、そのようなプロシージャが定義されていないと、`method_name` は現在のスキーマ内のプロシージャを指すものと解釈されます。

1.1.13 Oracle Lite の `loadjava` ユーティリティと `dropjava` ユーティリティ

このリリースには、Java クラスを Oracle Lite に追加するための新規ユーティリティ `loadjava` が含まれています。このコマンドライン・ツールを使用すれば、Java のクラス、ソース、およびリソースを Oracle Lite に個別にまたはアーカイブとしてロードできます。`dropjava` ユーティリティは、Java のクラスとリソースを Oracle Lite から削除します。

1.1.14 Java クラスの問合せ

SQL サブシステムが拡張され、SQL を介して `okJavaObj` および `okJavaMember` メタ・カタログを問い合わせられるようになりました。この機能により、データベースにどの Java クラスがロードされているかがわかります。

1.1.15 Oracle Lite のストアド・プロシージャとトリガー用 SQL 文

このリリースには、Java ストアド・プロシージャの作成と管理のための SQL 文が新しく追加されています。loadjava のかわりに使用できる SQL 文の CREATE JAVA は、Java のクラスとリソースを Oracle Lite にロードします。SQL 文の DROP JAVA CLASS は、Java のクラスまたはリソースを Oracle Lite から削除します。

SQL 文の CREATE FUNCTION と CREATE PROCEDURE は、ストアド・プロシージャ用のコール仕様を作成します。コール仕様を使用すれば、SQL 文で Java ストアド・プロシージャを起動できます。CREATE FUNCTION と CREATE PROCEDURE の目的上、ファンクションはコールされた環境に値を返す Java メソッドであり、プロシージャは値を返しません。つまり、プロシージャは戻り型が void の Java メソッドです。

DROP FUNCTION と DROP PROCEDURE は、コール仕様を削除します。

1.1.16 Oracle Lite SQL の EXPLAIN PLAN 文

このリリースでは EXPLAIN PLAN 文をサポートします。EXPLAIN PLAN 文は、Oracle Lite オプティマイザにより選択された SELECT 文の実行計画を表示します。EXPLAIN PLAN の実行後、現在のディレクトリの **execplan.txt** という出力ファイルに実行計画が出力されます。

1.1.17 Oracle Lite SQL のネストされた SELECT 文

SELECT 文の FROM 句の中に SELECT 文を入れられます。ネストされた内部の SELECT 文は、外部の SELECT 文で使用する動的なビューを定義します。

1.1.18 Oracle Lite SQL の SELECT FOR UPDATE 文内の NOWAIT

このリリースでは、単一表に対する SELECT FOR UPDATE 文で NOWAIT オプションをサポートします。NOWAIT が使用されたときに、表の修飾行の 1 つが別トランザクションによりロックされている場合は、エラーが返されます。

1.2 Oracle Lite の既知の制限事項

1.2.1 Oracle Lite の POLITE.ODB

新しい **POLITE.ODB** ファイルが¥OLDB40 ディレクトリに作成されます。ODBC データ・ソース名 (DSN) POLITE がこの新規データベースにリダイレクトされます。
Oracle_Home¥oldb35¥POLITE.ODB に既存の 3.5 データベースがある場合、このデータベースは削除されません。このデータベースにアクセスする場合は、3.5 データベースを移行して新規 DSN を作成する必要があります。移行ユーティリティの詳細は、『Oracle Lite ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1.2.2 Oracle Lite の Required Support Files (RSF)

このリリースでは、Required Support Files (RSF) のバージョン 8.0.5.0.0 がインストールされます。8.0.4 (またはそれ以前) の RSF を使用する Oracle 製品がインストールされている場合、RSF 8.0.5.0.0 をインストールすると、これらの Oracle 製品が正しく動作しなくなる可能性があります。問題が発生した場合は、RSF の前のバージョンを再インストールします。これで問題が解決されない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

1.2.3 Oracle Lite での DDL コマンドに関する制限

Oracle8 Navigator で表がオープンされている間は、その表に対して DDL コマンドを実行することはできません。

1.2.4 Oracle Lite と Oracle8 Navigator

Oracle8 Navigator では、SQL*Loader の起動がサポートされなくなりました。SQL*Loader が起動できるのは、DOS コマンドラインからだけです。

Oracle8 Navigator では、LONG 列を含む表をコピーできなくなりました。

Oracle8 Navigator のコマンド・オブジェクト、インポート/エクスポート、バックアップ/リストア、および SQL*Loader インタフェースに関する OLE コントロールは、公開されていません。これらのコントロールは Oracle8i Lite 製品専用であり、予告なしに将来のリリースで変更または削除される可能性があります。

Oracle8 Navigator のパブリケーションの「プロパティ」タブの「名前」フィールドと「値」フィールドに対する変更を適用するには、変更したフィールドからカーソルを移動して「適用」ボタンをクリックする必要があります。変更したフィールド上にカーソルがあるときに「OK」ボタンをクリックしても、変更は Oracle8 Navigator に適用されません。

1.2.5 Oracle Lite での SQL*Plus を使用した接続

SQL*Plus からデータベースに接続する際、「サーバーが使用可能でないか、またはこの機能に対してバージョンが古すぎます。Oracle Open Client Adapter for ODBC [version number] Oracle Lite ORDBMS [version number] に接続されました。」という警告メッセージを受け取ります。これは正常な動作であり、単なる警告です。SQL*Plus は、Oracle8i Lite DBMS または Oracle Server に接続できます。Oracle8i Lite DBMS に接続しているために、この警告メッセージが表示されますが、接続は正常です。

1.2.6 ODBC Administrator での Oracle Lite の「ODB」拡張子

DSN 定義にデータベースの.ODB 拡張子を指定するとエラーが発生することがあります。

1.2.7 Oracle Lite の Database_Size パラメータ

データベース・ファイルを作成するときに Database_Size パラメータを指定しても無視されます。エクステント・サイズは常に「1」です。

1.2.8 Oracle Lite のレプリケーション

ファイル・ベースのレプリケーションを使用するとき、1 つのリフレッシュ・グループ内のスナップショット数は最大 256 という制限があります。ファイル・ベースのレプリケーションの詳細は、『Oracle Lite レプリケーション・ガイド』を参照してください。

レプリケーション・カートリッジ (repcartx) にアクセスする URL は、大/小文字が区別されます。Oracle Application Server のカートリッジの構成で指定した文字とまったく同じもの (大文字と小文字) を使用する必要があります。

Oracle7 マスター・データベースを使用した Oracle7 レプリケーションで複合スナップショットを作成するには制限があります。定義する問合せが集合 (UNION)、結合 (JOIN) またはビュー (VIEW) を基にしており、ROWID に基づくスナップショットの作成が不可能な場合、スナップショットの作成は失敗します。

1.2.9 Oracle Lite の Open Client Adapter (OCA) と Developer/2000

Oracle Lite には、Open Client Adapter (OCA) が **UB80W32.DLL** として含まれているため、Oracle Tools (SQL*Plus リリース 8.0、Developer/2000 Release 2.1、Oracle8 Navigator リリース 8.0 など) を Oracle Lite ODBC ドライバとともに実行できます。ただし、使用するツールに新規バージョンの OCA が含まれている場合は、Oracle Lite をインストールしてから、新規バージョンの OCA をインストール (または再インストール) する必要があります。

注意: Developer/2000 の旧版 (バージョン 1.6 など) がある場合は、Developer/2000 の CD-ROM から旧版の OCA を再ロードする必要があることがあります。古いファイル名は **UB73W32.DLL** です。

1.2.10 Oracle Lite での Java ストアド・プロシージャの削除

Java クラスをストアド・プロシージャまたはトリガーとして起動した後、データベースから削除しても、そのクラスは、アプリケーションに連結されている Java 仮想マシン内にそのまま残ります。Java 仮想マシンからクラスをアンロードするには、必要に応じて変更をデータベースにコミットしてから、データベースに接続されているすべてのアプリケーションをクローズします。Java クラスを置き換えるには、データベースへの接続を

すべてクローズしてからクラスを再ロードする必要があります。詳細は、『Oracle Lite Java 開発者ガイド』を参照してください。

1.2.11 Oracle Lite Designer の使用

この製品に同梱されている Oracle Lite Designer 1.0.0.0.6 はサポート対象外です。付属の Oracle8 Navigator、または、SQL*Plus をお使いください。

1.3 Oracle Lite のトラブルシューティングのヒント

1.3.1 Oracle Lite DBMS コンポーネントの再インストール

Oracle Lite DBMS がすでにインストールしてあり、コンポーネントを再インストールする必要がある場合は、データベース接続をすべてシャット・ダウンし、タスク・リストを使用して OLITRM40 プロセスを終了するか、またはコマンドラインに OLITRM40 -k と入力して Recovery Manager を終了します。この手順を実行しないと、インストーラが **OLITRM40.EXE** や **OLOBJ40.DLL** などのファイルをインストールできないことを示すエラー・メッセージが表示されることがあります。

1.3.2 Oracle Lite データベース ODBC ツールを使用した表の更新

ODBC ツールが表またはスナップショットのアクセスまたは更新に失敗した場合は、表にプライマリ・キーがあることを確認します。ほとんどのツールでは、行を一意的に識別するためにプライマリ・キーが必要です。プライマリ・キーが見つからない場合は、表の表示はできても変更ができない可能性があります。副問合せに基づくスナップショットは、(a) ベース表のスナップショット・ログに含まれていない追加「フィルタ」列があるか、または (b) 副問合せに含まれている表のフィルタ列が、対応するそれぞれのスナップショット・ログに含まれていない場合に、プライマリ・キーを付けずに作成されることがあります。

2. Oracle Lite for Handheld Devices

この項は、Oracle Lite オブジェクト・カーネル API (OKAPI) に関するリリース・ノートです。

2.1 Oracle Lite オブジェクト・カーネル API (OKAPI)

OKAPI モジュールは C 言語のコール・インタフェースで、アプリケーションはこれを使用して Oracle Lite オブジェクト・カーネルの機能にアクセスできます。

2.1.1 OKAPI と SQL との同期後のデータ型対応

(サーバー上の) Oracle8 と携帯端末上の OKAPI および SQL との同期後のデータ型の対応を、次の表に示します。

Oracle8(サーバー)	OKAPI(端末)	SQL(端末)
integer	okU2B[10]	Number(38)
smallint	okU2B[10]	Number(38)
number(x<=4)	ok2B	Smallint
number(4<x<=9)	ok4B	Integer/Int
number(x,y)	okU2B[10]	Number(x,y)
char(x)	okChar(x)	Char(x)
varchar(x)	okChar(x)	Char(x)
varchar2(x)	okChar(x)	Char(x)
float	okFloat	Number
double precision	okFloat	Number
real	okFloat	Number
date	okU1B[12]	Timestamp
long raw(x)	okU1B[x]	Blob(x)

3. Oracle *i*Connect Consolidator

このリリースに付属している Oracle *i*Connect Consolidator は日本語環境での動作保証はありません。

4. Oracle Web-to-go

この項は、Oracle Web-to-go のリリース・ノートです。

4.1 Web-to-go の新機能

このリリースには、Oracle Web-to-go バージョン 1.3.1 が含まれています。新機能は次のとおりです。

4.1.1 Apache のサポート

Web-to-go を Apache のモジュールとして実行できます。

4.1.2 NT サービスのサポート

スタンドアロン・モードの Web-to-go Server を WindowsNT サービスとして実行できます。WindowsNT のサービスとしてインストールするには、Web-to-go をカスタム・インストールでインストールします。カスタム・インストールを実行するには Oracle8i Lite のインストール・オプション画面に表示されるメニューから「カスタム」を選択し、Software Asset Manager を起動して Web-to-go をインストールします。

4.1.3 Servlet API のサポート

Web-to-go は、Servlet 2.2 API をサポートします。

4.1.4 JavaServer Pages のサポート

Web-to-go では、Oracle JSP エンジン (ojsp.jar) を使用して JavaServer Pages を実行できます。Web-to-go SDK は JSP ファイルをサーブレット・クラスにコンパイルし、該当するサーブレットを実行します。アプリケーションをパブリッシュするときに、アプリケーションの一部としてコンパイル済サーブレット・クラスを配布する必要があります。Web-to-go Server は、*.jsp URL を対応するサーブレット・クラスにマップするだけでサーブレットを実行します。コンパイルは実行されません。

4.1.5 JDBC 1.1 によるアプレットのサポート

Java アプレットは、Web-to-go を使用してアプリケーション・データ・サーバーに接続し、JDBC 接続をオープンできます。Web-to-go がオンライン・モードで実行されているかオフライン・モードで実行されているかに応じて、アプレットは Oracle8i と Oracle Lite のいずれかに接続できます。どのデータベースおよびスキーマに接続されるかは、アプレット開発者には透過的です。

4.1.6 標準スタイルの JDBC ドライバのサポート

Web-to-go は JDBC ドライバを提供しますが、このドライバを使用すると、他の JDBC 接続の場合と同じように、DriverManager クラスからデータベースの接続オブジェクトを取得できます。Web-to-go の JDBC ドライバは、Web-to-go アプリケーションがオンライン・モードとオフライン・モードのいずれで実行されているかに応じて、正しいデータベースに接続します。

4.1.7 パブリッシュ・ウィザード - SQL の生成

パブリッシュ・ウィザードは、必要なデータベース・オブジェクトとレプリケーション・サポートをアプリケーション・データ・サーバー上に作成するために適した SQL を生成します。これらの SQL 文は、アプリケーションのパブリッシュ・フェーズで手動で実行する必要があります。

4.1.8 パブリッシュ・ウィザードの jar ファイル

パブリッシュ・ウィザードは、アプリケーション全体を単一の jar ファイルにパッケージ化します。このファイルは、パブリッシュ・ウィザードまたはコントロール・センターから Web-to-go Server にパブリッシュできます。

4.1.9 スキーマの変更

Web-to-go ではデータベース表定義内の変更を自動的に検出し、次回の同期時にこの変更をユーザーのスナップショットに適用します。検出される変更は次のとおりです。

- アプリケーションに対して追加または削除されたスナップショット
- 更新可能スナップショットから追加または削除された列

4.1.10 不要なアプリケーションのクライアントからの削除

特定の Web-to-go クライアントのどのユーザーも使用しなくなったアプリケーションは、ローカルな Web-to-go リポジトリ (webtogo.odt ファイル) から削除されます。これには、ファイルとデータベース・オブジェクトの両方が含まれます。

4.1.11 ワークスペースでの Web-to-go 以外のアプリケーションのサポート

Web-to-go のワークスペースに、サード・パーティの Web サーバーに対するブックマークを格納できます。

4.1.12 スナップショット・サイトの管理

システム管理者は、特定の Web-to-go クライアント上のユーザーのスナップショット・サブスクリプションを削除できます。Oracle8 では、すべてのスナップショットに関して、マスター表に加えられた変更を追跡します。使用されなくなったスナップショット・サブスクリプションを削除すると、データ・リプリケーションのパフォーマンスが向上します。

4.1.13 クライアント・サイトの追跡とレポート

Web-to-go 管理者は、クライアント・サイトを追跡することにより、すべての Web-to-go クライアントからのデータを表示できます。Web-to-go は、Web-to-go クライアントの同期中に情報を自動収集します。管理者はコントロール・センターを使用して追跡情報を表示できます。

4.1.14 管理用ランタイム・レポートの生成

コントロール・センターは、Web-to-go の状態を管理者に通知するランタイムのレポート生成メカニズムを提供します。

4.1.15 システムのメンテナンス

Web-to-go Server はメンテナンス・モードにできるようになりました。このモードには、管理者権限を持つユーザーのみがログインできます。管理者はコントロール・センターを使用して、Web-to-go Server を通常モードとメンテナンス・モード間で切り替えられます。

4.1.16 Web-to-go リポジトリの移行

Web-to-go Server の今回のリリースでは、以前のリリースからの移行をサポートします。移行を行う場合は、以前のリリースをアンインストールせずに、今回のリリースをインストールします。なお、移行には制限事項があります。4.3 項を参照してください。

4.2 Web-to-go の Java 要件

Web-to-go Server の今回のリリースでは、Java Runtime Environment (JRE) のバージョン 1.2.2 (またはそれ以上) が必要です。JRE は Web-to-go Server には同梱されません。Web-to-go Server をインストールする前に JRE をインストールする必要があります。

Web-to-go SDK の今回のリリースでは、Java Development Kit (JDK) のバージョン 1.2 (またはそれ以上) と Java Servlet Development Kit (JSDK) のバージョン 2.1 (またはそれ以上) が必要です。JDK と JSDK は Web-to-go SDK には同梱されません。JDK と JSDK は、Web-to-go SDK をインストールする前にインストールする必要があります。Web-to-go Web Server は、Java Servlet Development Kit (JSDK) バージョン 2.1 (またはそれ以上) をサポートします。

マシンに JDK をセットアップする方法は、『Oracle Lite Java 開発者ガイド』の「Oracle Lite が提供する Java 開発環境」を参照してください。JSDK の詳細は、サン・マイクロシステムズ社の Web ページを参照してください。

Web-to-go の今回のリリースは、サン・マイクロシステムズ社の Java 仮想マシン (JVM) でのみその使用が確認されています。

4.3 Web-to-go の既知の制限事項

Web-to-go Server の今回のリリースでは、以前のリリースからの移行をサポートします。ただし、Web-to-go リリース 1.1 からの自動移行はサポートされていません。リリース 1.1 がインストールしてある場合は、Web-to-go Server の今回のリリースをインストールする前に、リリース 1.1 をアンインストールする必要があります。

コントロール・センターの中からアプリケーションをアップロードすると、アプリケーションの仮想パスと同一名のディレクトリの下にある Web-to-go リポジトリに格納されます。

Web-to-go SDK および Web-to-go クライアントは、同一クライアント・マシン上にはインストールできません。

5. Oracle AQ Lite

今回のリリースには Oracle AQ Lite が含まれています。Oracle AQ Lite は、モバイル端末と Oracle8i Server 間で信頼性の高いメッセージ通信を提供するメッセージ・キューイング・サービスです。AQ Lite は、Oracle8i のアドバンスド・キューイング (AQ) 機能に基づいています。AQ Lite は、Oracle8i の AQ 機能をモバイル端末にまでシームレスに拡張します。詳細は、『AQ Lite 開発者ガイド』を参照してください。

6. インストールに関する注意事項

この項には本リリース 4.0.1.2 CJK 版でのインストールにおける注意事項が記述されています。

6.1 インストールにおける Oracle8i Lite の制限

Oracle8i Lite は、旧来からの Oracle Installer を搭載しています。Oracle8i Lite 付属の Oracle Installer は、2000 年問題に対応し、Multi Oracle Home 構成も可能なものです。ただし、Oracle8i Lite は、Default Home にのみインストールすることが可能です。たとえ Multi Oracle Home 構成であっても、デフォルト以外の Oracle Home にインストールすることはできません。

6.2 Oracle8i と Oracle8i Lite の同一マシンへのインストール

Oracle8i と Oracle8i Lite を同一マシンにインストールする場合には、インストールの順番に注意をする必要があります。Oracle8i Lite は、Oracle Installer によってインストールされますが、Oracle8i は、Universal Installer でインストールされます。Oracle Installer が作成した Oracle Home に対して、Universal Installer を使ってコンポーネントをインストールすることはできますが、逆のケース、すなわち Universal Installer が作成した Oracle Home に Oracle Installer を用いてコンポーネントをインストールすることはできません。従って、最初に Oracle8i Lite のインストールを行う必要があります。一般に、Universal Installer を使う製品と Oracle Installer を使う製品を同じマシンへインストールする場合、Oracle Installer を使う製品を先にインストールします。

6.3 Oracle8i と Web-to-go サーバーの同一マシンへのインストール

Oracle8i Lite のコンポーネントの一つである Web-to-go は、インストール時に Oracle8i 等のサーバー・データベースにアクセスをし、リポジトリを構成します。これは、Web-to-go サーバのインストール時に、Oracle8i が既に起動している必要があることを意味しています。ところが、前述の制限により、Oracle8i Lite 側のコンポーネントをインストールしなければならないため、通常の手順では Oracle8i と Web-to-go サーバを同一マシン上にインストールすることができません。これを回避するためには、次のようにします。

1. まず、Oracle8i Lite をインストールします。
このとき「カスタム・インストール」を選択して Software Asset Manager を起動し、任意のコンポーネントをインストールできるようにします。
2. 次に、Web-to-go サーバ以外のコンポーネントを適当にインストールします。
例えば、Oracle Installer をインストールします。こうすることによって先に、Oracle Installer の Oracle Home を作ってしまいます。
3. いったんインストーラを終了し、Oracle8i の方をインストールします。
この時、Default Home 以外の場所にインストールしなければなりません。
Web-to-go のインストールには Oracle8i のリポジトリを作成する Oracle8i が稼動している必要があります。このとき、もし、Oracle8i が Web-to-go サーバと同じ Oracle Home にインストールされていると、起動中の Oracle8i がファイルのいくつかをロックしてしまい、Web-to-go サーバのインストールを妨げてしまうからです。
4. Oracle8i を起動します。
5. Web-to-go をインストールします。

以上でインストールは終了します。

7. 4.0.1.2 CJK 版における補足事項及び制限事項

この項には本リリース 4.0.1.2 CJK 版における補足事項と制限事項および動作環境が記述されています。

7.1 4.0.1.2 CJK 版における補足事項

7.1.1 Oracle Lite for Branch Offices

このリリースに付属している Oracle Lite for Branch Offices は日本語環境ではサポート対象外です。

7.1.2 Oracle Lite for the Palm Computing Platform

このリリースに付属している Oracle Lite for the Palm Computing Platform は日本語環境ではサポート対象外です。

7.1.3 Oracle Lite for EPOC

このリリースに付属している Oracle Lite for EPOC は日本語環境ではサポート対象外です。

7.1.4 Oracle Lite 1 テーブルの最大カラム数

Oracle Lite 1 テーブルの最大カラム数は 254 カラムです。現在 Oracle8 あるいは Oracle8i の 1 テーブルの最大カラム数は 1000 カラムですから、255 以上のカラムを持つサーバ側のテーブルをレプリケーションする場合、レプリケーションするカラムを減らすなどの工夫が必要です。

7.1.5 アンインストール時の常駐プロセスの停止

Oracle8i Lite のアンインストールを行うときは、アンインストールするクライアント上で稼動しているすべての ORACLE に関するサービス、プロセスを止めてください。Oracle8i Lite には、下記の 3 つの常駐プロセスがお使いの環境に応じて稼動しています。

- a) Oracle Lite Administrator Clean Up このプロセスは、Oracle Lite データベースを使用しているとき稼動している場合があります。インストール時のデフォルト設定では稼動しています。このプロセスを止めるには、コマンドラインより OLITRM40 -k と実行します。
- b) Message Gateway and Processor このプロセスは、Consolidator for Palm を使用している場合は必ず稼動しています。このプロセスを終了させるには、Message Gateway And Processor がログを出力している DOS ウィンドウで、[CTRL]-C キーを押して強制終了してください。
- c) Web-to-go Client プロセス C は、Web-to-go のクライアントです。Web-to-go を使用しているときはクライアント・マシン上で必ず稼動しています。このプロセスを終了させるには、タスクバーに表示されている Web-to-go クライアントのアイコン上で右クリックをしてポップアップ・メニューを表示させ、[EXIT]を選択してください。

また、Web-to-go Client には専用のアンインストーラーが付属しています。Web-to-go クライアントをアンインストールするとき、は必ず専用のアンインストーラーを使用してください。アンインストーラーは Web-to-go クライアントをインストールしたディレクトリ内に UNINST.EXE というファイル名で存在しています。

7.1.6 ADO/RDO のサポート

Oracle8i Lite では、RDO によるデータベースアクセスと OLE DB を使用しての ADO の使用をサポートします。サポートされる ADO のバージョンは ADO 1.0, ADO 2.0 及び ADO 2.5 です。

7.1.7 Web-to-go による ODBC エントリの追加

Web-to-go クライアントをインストールする際、Web-to-go クライアントから ODBC の使用を可能にするよう設定する場合、インストール先のマシンの ODBC DSN のリストに webtogo をいうエントリが既にあると、Web-to-go Client による ODBC 設定が失敗します。

これはインストール先のマシンに Web-to-go SDK をインストールしている場合などに発生します。

この現象を回避するには、Web-to-go クライアントのインストール前に ODBC DSN のエントリを確認し、webtogo という DSN が既にエントリされている場合は、あらかじめ手動で削除しておく必要があります。ODBC DSN の削除には、ODBC Administrator を使用が使用できます。

なお、Web-to-go クライアントが稼動するマシンで、Oracle Lite に対する ODBC アクセスを行わない場合はこの問題への対処は必要ありません。

7.1.8 旧バージョンの polite.ini ファイルの削除

旧バージョンの polite.ini ファイルが残っていると、Oracle8 Navigator でレプリケーションが失敗することがあります。Oracle8i Lite のインストール前に旧バージョンの polite.ini ファイルを削除またはリネームしてください。polite.ini は、%SYSTEM_ROOT% ディレクトリにインストールされます。

7.1.9 インストレーション・ガイドの参照について

インストレーション・ガイドは、製品メディア内の WIN32¥DOC¥OLDOC40¥JA ディレクトリにある install.htm ファイルから参照できます。

7.1.10 Oracle8i Lite コンポーネントのアンインストール

Oracle8i Lite コンポーネントのアンインストールを行う場合は、Oracle 製品に関連するアプリケーションやサービスをすべて終了または停止してください。たとえばアンインストール時に Oracle8 Navigator や、SQL*Plus などが立ち上がっていると、アンインストールできません。このような形でアンインストールが中断すると、Oracle Installer ではアンインストールできなくなってしまう場合があります。

7.1.11 Open Client Adapter のアンインストール

Open Client Adapter(OCA)を Software Asset Manager を使ってアンインストールすると、OCA のコンポーネントの一部である、Open Client Adapter Deployment

Components がアンインストールされずに残ります。この場合、Open Client Adapter Deployment Components を単独で選択し、再度アンインストールを指示することで削除できます。

7.1.12 Oracle Lite Runtime のアンインストール

Oracle Lite Runtime を Software Asset Manager を使って他のコンポーネントとともにアンインストールするとき、エラーによりアンインストールできない場合があります。この問題を回避するには、アンインストールの最初の手順でまず Oracle Lite Runtime のみを選択し、アンインストールを行ってください。その後その他のコンポーネントのアンインストールを行います。

7.1.13 Web-to-go クライアントのアンインストール

Web-to-go クライアントのアンインストーラ `uninst.exe` は、Web-to-go が使用した Oracle Lite データベース・ファイル、およびインストール先のディレクトリを削除しません。これらを完全に削除するときは、当該ファイルやディレクトリを手で削除してください。

7.1.14 レプリケーション時のサーバ・バージョン

iConnect の Advanced Replication を用いて Oracle8 サーバとレプリケーションをする場合、サポート対象となるサーバ・バージョンは 8.0.3 以降です。ただし、日本オラクルは 8.0.5 以上のサーバを以上を推奨します。Oracle8i Lite ユーザーズ・ガイドには、8.0.5 以上を使用するように記述されていますが、これは推奨バージョンです。

7.1.15 LOB データのレプリケーション

Oracle8i Lite は、RAW 型を使って擬似的に LOB データのレプリケーションを実現しています。Oracle サーバで実装されている LOB 型のデータ(BLOB, CLOB, LONG RAW, LONG)などのデータをレプリケーションすることはできません。なお、Oracle8i Lite は、BLOB や CLOB といったデータ型をサポートしていません。

7.1.16 CHAR 型のカラムに対する LIKE 検索

CHAR 型のカラムに対する LIKE 検索を行う場合、文字数に対する意識が必要です。たとえば、CHAR(8) という型のカラム `name` に 'ORACLE' という文字列が格納されているとき、内部的には 'ORACLE ' (ORACLE とホワイトスペースが 2 文字) として格納されています。このため `WHERE name LIKE 'ORACLE'` としてもこの行は選択されません。こういった行を選択するためには `WHERE name LIKE 'ORACLE%'` としてください。

7.1.17 Publish Wizard の操作について

Publish Wizard を使用して既存のアプリケーションを編集する場合は、タブをクリックすることでタブ間の移動が可能です。

7.2 制限事項

7.2.1 Web-to-go カートリッジと Replication カートリッジの共存

Oracle8i Lite には、Web-to-go カートリッジと Replication カートリッジという二つの Oracle Application Server 用カートリッジが同梱されています。これら二つのカートリッジは共存して稼動することができません。

7.2.2 Oracle8 Navigator による競合発生行の更新

スナップショット・リフレッシュによって競合が発生した場合、競合が発生した行に対し Oracle8 Navigator から更新することができません。このような場合該当行に対しての更新処理は SQL*Plus から行います。

7.2.3 Oracle8 Navigator によるシーケンスの作成

Oracle8 Navigator によるシーケンスの作成ができない場合があります。シーケンス作成が行えない場合、SQL*Plus からシーケンスの作成を行ってください。

7.2.4 二つ以上の外部結合を含むクエリ

二つ以上の外部結合を含むクエリは使用できません。

7.2.5 マルチ・オラクル・ホームへの未対応

Oracle8i Lite はマルチ・オラクル・ホーム環境に対応していません。必ずデフォルト・オラクル・ホームへインストールしてください。デフォルト・オラクル・ホーム以外の場所にインストールしようとするとエラーが発生し、その際に作成したオラクル・ホーム設定が消去できなくなります。

7.2.6 Windows CE 版 Oracle Lite における Remote ODBC 機能

Windows CE 版の Oracle Lite における Remote ODBC 機能では、IP アドレスを使って Windows CE デバイスを認識しています。この IP アドレスは Windows CE 版 Oracle Lite のインストール時の IP アドレスが使用されます。従って Windows CE デバイスの TCP/IP 設定が DHCP クライアントとなっている場合のように、Windows CE デバイスの IP アドレスが変わってしまった場合、Remote ODBC 機能は使用できません。固定 IP アドレスを利用してください。また、固定 IP アドレスの場合でも IP アドレスが変更された場合、Remote ODBC 機能が使用できなくなります。IP アドレス変更後も Remote

ODBC 機能を利用する場合は、Windows CE 版 Oracle Lite を再インストールしてください。

7.2.7 Web-to-go カートリッジのリロード

Web-to-go カートリッジは、Oracle Application Server(OAS)のカートリッジのリロード機能に対応していません。カートリッジのリロードを行った後、Web-to-go カートリッジの起動画面から起動を指示すると、カートリッジが起動したかのように見えますが、実際は起動をしていません。カートリッジのリロードが必要な状況が発生した場合、OAS の再起動することが必要です。

7.2.8 複合主キースナップショットにおける削除競合時のリフレッシュの動作

レプリケーション機能を複合主キースナップショットを使用して行う場合、削除競合時のリフレッシュ動作においてマスターのデータが反映されずスナップショットサイトのデータがそのまま残るという現象が確認されております。レプリケーションを使用する場合は、単一主キースナップショットをご使用ください。

7.2.9 1 番目、2 番目のカラムに VARCHAR または VARCHAR2 データ型を持つ表の検索

Windows CE 版 Oracle Lite において、1 番目、2 番目のカラムに VARCHAR または VARCHAR2 データ型を持つ表に対し、そのカラムを一致条件として使用する検索では(WHERE col1 = 'A'など)正しい検索結果が得られません。この問題は、VARCHAR または VARCHAR2 データ型を CHAR データ型に置き換えることにより回避できます。

7.2.10 LIKE 条件を使用した表の検索

Windows CE 版の Oracle Lite では、LIKE 条件を使用した表の検索はできません。この問題は、次期リリースで修正される予定です。

7.3 4.0.1.2 の動作環境

本リリースに付属の各コンポーネントの動作環境は次の通りです。各コンポーネントのマニュアルに同様の記載がある場合でも、本項の記載が優先します。本項に記載のない要件は、各コンポーネントのマニュアルをご覧ください。

□ Oracle8i Lite

- 対応 OS
 - Windows95, Windows98, WindowsNT 4.0 (Windows2000 は Oracle Lite のみ)
 - すべての Service Pack がサポート対象です。

- Windows CE 2.0 ~ 3.0 (Oracle Lite for CE)
- 対応ハードウェア
 - i486 以上の CPU を持つ AT 互換機(Win32 Platform)
 - SH-3 または Mips の CPU を持つ Handheld PC, Handheld PC Professional Edition, Palm-size PC または Pocket PC
- 最小稼動メモリ
 - 1M (Oracle Lite ランタイム使用時)
 - 8M (Oracle Lite for CE/ インストールのためのメモリを含む)
 - 12M(Web-to-go クライアント)
 - 11M(Web-to-go サーバー)
- ハードディスク
 - 3M (Oracle Lite ランタイムインストール時、インストール形態によりさらにディスクが必要)
 - 140M (Oracle Lite パッケージインストール時)
 - 10M (Web-to-go クライアント)
 - 25M (Web-to-go サーバー)
- 読み込み専用スナップショットを使用する場合:
 - Oracle8i Enterprise Edition R8.1.5 ~ R8.1.6
 - Oracle8i Workgroup Server R8.1.5 ~ R8.1.6
 - Oracle8 Enterprise Edition R8.0.3 ~ R8.0.6
 - Oracle8 Workgroup Server R8.0.3 ~ R8.0.6
 - Oracle7 Server R7.3 以上
 - Oracle7 Workgroup Server R7.3 以上
- 更新可能スナップショットを使用する場合:
 - Oracle8i Enterprise Edition R8.1.5 ~ R8.1.6
 - Oracle8i Workgroup Server R8.1.5 ~ R8.1.6
 - Oracle8 Enterprise Edition R8.0.3 ~ R8.0.6
 - Oracle7 Server R7.3 以上(要 Advanced Replication Option)
- HTTP によるレプリケーションをする場合
 - Oracle Application Server for Windows NT R4.0.7.1 以上(Oracle Web Application Server および、Oracle Internet Application Server 8i は使用できません)
 - レプリケーション・カートリッジは WindowsNT 4.0 でのみ稼動します。
- ファイルベース・レプリケーションを使用したレプリケーションの場合
 - レプリケーション・エージェントは WindowsNT 4.0 でのみ稼動します。
- Advanced Queuing Lite を使用する場合
 - Oracle8i Enterprise Edition R8.1.5 ~ R8.1.6 と Object Option が必要です。
 - サーバ・キューとクライアント・キュー間の通信は Net8 のみに対応しています。
- Web-to-go の使用

- Web-to-go サーバを他の Web サーバと併用する場合、Oracle Application Server for Windows NT R4.0.7.1 以上および、Oracle Internet Application Server 8i for Windows NT R1.0 に対応しています。(Oracle Web Application Server は使用できません)
- Web-to-go サーバの実行には、JDK1.2 以上または JRE1.2 以上が必要です。(Java2 を含みます)
- Web-to-go SDK の実行には、JDK1.2 以上に加え、JSDK の 2.1 以上が必要です。(Java2 を含みます)
- OCI/OCA
 - Oracle Call Interface(OCI)/Open Client Adapter(OCA)を利用して Oracle Lite へ接続する場合、サポート対象となるのは、次の場合に限られます。
 - SQL*Plus 8.0.5 を使用する場合
- Consolidator for Palm
 - 同梱の CD-ROM「Oracle8i Lite R4.0」内のリリース・ノートを参照してください。
- その他の Java 機能の使用
 - Oracle Lite の Java 機能を使用する場合、JDK または JRE 1.1.8 以上が必要です。(Java2 を含みます)

Copyright © 2000 Oracle Corporation.
All Rights Reserved.

制限付権利の説明

プログラム(ソフトウェアおよびドキュメントを含む)の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation(米国オラクル)または日本オラクル株式会社(日本オラクル)を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation(米国オラクル)およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合

次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are “commercial computer software” and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are “restricted computer software” and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software – Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。